

わたしは、立教大学に1991年4月に着任した。札幌市の私立大学（北海学園大学）を9年間、勤めた後の事であった。それからちょうど25年、この3月に退職をむかえる。

わたしのこの25年間は立教大学の教育・研究環境の大きな前進、そして経済学部のその歩みとともにあった。いま冷静に振り返ると、大学の環境のこの間の大きな変化に驚かされる。全学共通カリキュラム（以下、全カリと略す）がスタートしたのは1997年。研究棟（12号館）が完成したのは2002年。観光学部（1998年）、経営学部（2006年）など次々と学部が新設された。

赴任当初は、正直なところ、驚くことが多かった。研究室は3号館にあったが、札幌の私大時代には考えられないほどの手狭さであった。来客があっても学生が来ても、そこではゆっくり話すことさえできなかつた。また、東京の大学であるのに教室はもとより研究室にクーラーは無く、7月に入つての授業は汗まみれで行うことも少なくなかつた。違和感をもつたのは、経済学部の学生が全員、週一日だけであるが新座キャンパスで授業（基礎演習、体育、情報処理入門）を終日受けるという「新座一日利用」制度が開されたことである。教員はまだしも、負担を感じた学生はさぞかし多かつたであろう。多くの不合理（と思われた）事態に直面し、面食らうことが多々あつた。しかし、不満を言うまえにまず慣れることに努力した最初の数年であつた。

こうした環境のなかではあつたが、1990年代半ばに情報処理教育が学部のカリキュラムに定着したことには大きな意義があつた。当時、情報教育環境は新座キャンパスのほうが格段に整つていた。パソコン教室がいくつもあつた。ただ、教室に学生の姿はほとんど見られなかつた。有効にこれらの教室を使う授業がなかつたからである。学部の「新座一日利用」制度は学生には負担であつたかもしれないが、この制度によってパソコン教室の利用頻度が間違いなく向上したのは確かである。なにしろ「大所帯」の経済学部の学生が全員、新座展開の学部カリキュラムのなかの情報教育でパソコン教室を使うことになつたからである。

当時、大学の情報教育はまだはしり<sup>・</sup><sup>・</sup>で、インターネット利用はまだなく、授業は経済学の基礎的理解を深める教材を意識しながら、その手段として「一太郎」「ロータス123」（数年たつてインターネットの活用が本格化し、「Word」「Excel」に代わる）のソフトを活用するという内容であつた。この頃の経験が、現在の経済学部の情報処理教育の土台である。当時はまだ担当教員が各自、苦勞して教材を作成し、試行錯誤で教育内容の情報交換をしながらの授業を行つていた。現在は池袋キャンパスでは、通年で共通のテキストを使い、全ての教室で足並みをそろえての授業展開が演習形式であり、最終の統一筆記試験まで系統的教育がなされている。

ところで、わたしは学部で「統計学」「経済統計学」の授業を担当してきたが、学部の情報教育のこの充実、これらの科目の授業展開の下地になっている。以前の学生の認識は、統計学と言えば数学の一分科を連想し、できれば避けたい科目であったかもしれないが、今やこうしたアレルギーはとりのぞかれていると思う。わたしの授業を受けた学生はたぶん実感しているはずである。統計学は数学とイコールではない(数理統計学は数学の一分野)。統計学関連の授業でも情報関連科目のそれでも、わたしたち教員が心がけているのは、種々の社会統計、経済統計がどのように作成されるのか、それらを分析のためにいかに使うのか、その方法を学生に理解させることである。換言すれば、統計作成の仕方(統計調査論)、見方・使い方(統計利用論)の方法を習得させることに授業の目的が定められている。大方の数理統計学のテキストにはその説明がなく(少なく)、いきなり平均、比率、偏差、相関、回帰、確率などの統計計算から入り、それらを基礎にした数理的統計計算に終始し、ある意味で偏った統計教育が横行している。学部の初年次の情報教育の充実、統計関連科目の授業を効果的に進めるうえで大切な授業となった。

付言すると、学部カリキュラムの「統計学」の科目は次年度から自動登録となり「必修科目」ではないが、事実上ほぼ100%の学部学生が履修することになる。わたしが立教大学に着任した頃の「統計学」のいささか頼りない位置づけからみれば、隔世の感がある。

こうした事情を背景に、わたしは身近な統計について学部を問わず学生がそれらの見方、使い方を理解してもらいたいとかねてから考えていた。大学を巣立って社会人になれば、今の時代、統計に接することがますます頻繁になる。ここで身近な統計というのは、国勢調査、消費者物価指数などであり、数え上げれば枚挙にいとまがない。そのような関心で旧全カリのカリキュラム内容がかつて眺めていたわたしは、そこに統計学関連の科目がなく、懸念をもったものである。

そこで、わたしが2009-10年度に全カリの総合教育構想運営チームに所属し、現行全カリの体系構成の案を議論していたおり、カリキュラムのなかに「景気・格差問題と統計情報」という科目を提案し、メンバーの方々にこれを認めていただいた。担当者の引き受け手がもし誰もいなければ、わたし自身が担当するつもりでいたが、幸い社会情報教育センターの助教の先生に担っていただけることになった。現在は、この科目以外にも統計に関わる科目がオンデマンドで展開されている(「社会調査入門」「社会調査の技法」)。

「統計=数学」という観念は簡単になくならないが、学生諸君がこの観念に支配されて統計を忌避することがあれば、それは大学教育の失着である。学部教育に情報処理や統計学の科目がしっかりと根つき、全カリでも学部を超えて統計学関連の科目を履修できる状況になった。退職後も期待を込めて応援したい。